

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

# 行為的直観と自覚 諸科学の方法の基礎と哲学の方法

著者	黒田 昭信
著者別名	Kuroda Akinobu
雑誌名	国際哲学研究
号	2
ページ	44-48
発行年	2013-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00005269/">http://id.nii.ac.jp/1060/00005269/</a>



# 行為的直観と自覚

## —諸科学の方法の基礎と哲学の方法—

黒田 昭信

西田が哲学の方法をそれとして彼なりの仕方で厳密に規定しようとするのは、それをその他の科学の諸方法と区別し、それらとの関係を明確にしようという意図からであり、その試みは、最後期の西田哲学の二つの機軸概念である「自覚」と「行為的直観」との区別と関係を基点としてなされている。

はじめに、その規定を図式的に示しておく。まず、理由の順序に従うとき、哲学の方法は科学の諸方法に先立つ。というのは、前者は直接「創造的自己」に基づいているのに対して、後者は「ポイエーシス的自己」によって実行され、ポイエーシス的自己は創造的自己に基づいているからである。哲学の方法は厳密な意味での自覚によって遂行されるのに対して、科学の諸方法は行為的直観に基づいている。ところが、事実の順序に従うとき、自己はまず行為的直観の経験からポイエーシス的自己として自覚し、そしてこのポイエーシス的自己が今度は創造的自己として自覚し、これこそが厳密な意味での自覚である。

### 1 行為的直観とは何か

哲学の方法としての自覚から区別され、科学の諸方法として一より正確には、それらを可能にする現実経験の原初的動的形態として一それに対置された「行為的直観」は、最後期の西田哲学の地平にその根本概念の一つとして登場する。

#### 1.1 行為的直観の基本的規定

まず、行為的直観の基本的規定を次の五点にまとめて示そう。

(1) 「行為的直観の世界は、無限の世界である。行為的直観とは無限の過程でなければならない」<sup>1</sup>。行為的直観は私たちの行為する身体においてたえず始まりつづける、つねに始まりとして働きつづける始まりである。それは私たちの世界においてそこに諸事物をそれとして現出させる世界の自己限定作用としてつねに現実的に作用している。本質的内在化作用として、行為的直観は、その能動性と受動性の両契機によって、諸事物の、私たち行為する身体に対する無関係な外在性を否定し、それらをそれら自身の十全な形において自らに現れさせる。行為的直観は、世界に帰属する私たちの行為する身体によって担われているゆえに、世界の只中であって世界自身の自己否定作用として現実化されるが、それゆえにこそ世界において諸事物がまさにあるがままの諸事物として現れる。この行為的直観が、「現実が、自己自身の中から自己自身を超え自己自身を構成し行く、自己構成の過程」<sup>2</sup>をもたらすのである。

(2) 行為的直観は主体にも対象にも従属しない。むしろ行為的直観によって開かれる世界において主体と対象とがそれとして分節化される。行為的直観によって直接把握された諸事物は、世界のうちに行為的直観の「形」<sup>3</sup>そのものを描き出す。諸事物は行為的直観がそこにおいて現実化される構成形態を表現している。行為的直観の領野においては、いかに外的現実が視覚に対して現れるのかという問いは適切な問いではない。なぜなら、行為的直観の領野においては、何らかの主体との関係における外部と内部との区別を前提として導入することはできないからである。この区別は行為的直観においてもたらされる原初的経験についての反省的抽象化の手続きによってのみ獲得されるものである。

(3) 行為的直観はその根本において世界の原初的出来事である。行為的直観がまさにそれとして現実に行われるその初源の次元においては、つまりそれに対して事後的なすべての認識が定義上排除されるその最初の契機においては、ただ世界の一つの経験があるだけである。世界のあらゆる認識の起源にある行為的直観は、意識に対して与えられるのでもなく、意識の権能の支配下におかれているのでもなく、それ自身からしか、その固有の本質からしか説明されえないものである。発生的順序にしたがって言えば、行為的直観が世界の統一化契機としての時間性とその差異化契機としての空間性を発生させるということから意識の生成が説明される。

(4) 行為的直観は知覚世界に帰属しない。まったく逆に、知覚が行為的直観の世界の一部をなす。行為的直観は歴史的世界の原初的経験であり、それが世界の認識と自己の認識を可能にする。この経験は世界がその内部そのものに自己を否定する要素を生むということからなっている。この世界の自己否定が行為的直観として現実に行われ、その起動点は私たちの行為する身体にある。世界の、世界における出来事として、行為的直観は「世界の自己否定の肯定として現れ来るものたるに過ぎない」<sup>4</sup>。

(5) 行為的直観は「極めて現実的な知識の立場を云うのである。すべての経験的知識の基となるものを云うのである」<sup>5</sup>。しかしながら、「行為的直観そのままが知識だと云うのではない」<sup>6</sup>。行為的直観はあらゆる認識のいわゆる出発点でもなければ、その直接の基礎なのでもない。認識の展開を通じて、行為的直観はつねに世界の直接把握として働いているのである。それはまた何らかの理論がそこから構成される認識の基礎でもない。最初の自明性の直接経験である行為的直観は、そこから推論が推し進められるような仮説的命題を自らに与える作用に還元されるものではない。

## 1.2 行為的直観の原基的次元

行為的直観には区別されるべき二つの次元がある。まず、すべての種的な行動、つまりある種に固有の諸行動は、原基的次元にある行為的直観と見なされる。この意味での行為的直観には諸動物たちの種的行動もすべて含まれる。それに対して高次の行為的直観は人間においてのみ現実化される。

ある種に固有の行動がその種に固有の環境の中で生ずるとき、この行動はその主体が見出される環境そのものの中に種々の「形」のある配置を描き出す。このことが意味するのは、世界のある構成形態はこの行動そのものによって直接に現実化されているのであり、この行動が、それが実行される環境にとってもその行動の主体にとっても現実的な、諸々の形のある配置を現出させているということである。生きた身体がそれ固有の環境においてある一定の仕方で行動するという事は、その行動の主体によって環境がその環境として限定されるということと同時に、その主体もその主体として自らがそこにおいて行動する環境によって限定されているということを意味している。そこにおいて、環境を構成する諸事物の認知が身体的行為によって直接的に形として表現されているとき、行為的直観が実行されているということができるし、その逆も言うことができる。この次元においては、主体と環境との関係の変化の可能性を認めることは、両者によって保たれている事物の諸形態の配置が変化を蒙ることがありうるかぎりにおいて正当と見なせるが、創造の契機をそこに導入することはできない。なぜなら、この次元では、主体はその環境にも自己自身にも、所与に対して新しい構成形態を自ら作り出すことはできないからである。この次元での行為的直観において現実化されているのは、主体と環境との形態的相互限定である。

## 1.3 人間存在の自己形成作用としての行為的直観

厳密な意味での行為的直観、つまり高次の行為的直観は、歴史的事実の世界あるいは歴史的生命の世界の中で人間存在によって現実化される。

行為的直観は歴史的世界において形が形自身を自ら限定するということからなる。それはこの世界の「歴史的身体」によってこの世界において現実化される。それゆえもはやそこでは主体と環境との相互限定的な関係、つまり本質的に連続性、反復性、画一性によって特徴づけられる二項関係が問題なのではない。人間存在による行為的直観は、世界が自らの内部そのもので、諸々の形のある構成形態を自らに与えることからなる。この動的で創造的な構成形態の知覚的中心が私たちの行為する身体にほかならず、この身体が西田によって歴史的身体と名付けられる。「形が形自身を限定することが、行為的直観と云うことである」<sup>7</sup>。つまり世界が私たち行為する身体によって

自己自身を限定し、自己自身を形作り、その行為する身体も含めたすべての自己構成要素に〈形〉を与えることが行為的直観にはかならない。

人間存在による行為的直観は、世界の諸事物の配置あるいはその構成形態の創造の起源に、世界の世界自身についての新しい認識ならびに世界の新しい自己形成作用の産出の起源にある。世界のこれらの諸配置あるいは構成形態は私たち歴史的な身体を構成員とする共同体によってそれと認知され、共有され、保存されうるが、と同時に、それらは一つの歴史的な身体によって否定され、破棄され、変容させられることもありうる。自己形成的な歴史的な実在の世界における行為的直観の起動点として、人間存在はこれらの諸配置あるいは構成形態との関係において、それらの只中であって、自らをある一定の形に自己限定する。この行為的直観によってこそ、世界は自らを理解し、自らを表現し、その内部そのものにおいて自らに〈形〉を、つまり諸々の形の構成形態を与える。

西田において、生物の世界とはただ「作られたもの」からなる世界であり、ある限定された諸形態の無際限の繰り返しにとどまり、そこには創造性が見出されない世界である。それに対して、人間存在がそれとして生きる歴史的現実の世界は、生物の世界とは異なって、「作られたものから作るものへ」と展開する<sup>8</sup>。私たちの行為する身体は作られたものであると同時に作るものであるから、まさに私たちの身体においてこの作られたものから作るものへの転回、反復から創造への転回がこの世界の只中に到来する。歴史的な生命の世界では、作られたものは作るものを産出するために作られている。

「行為的直観とはポイエーシス的自己の過程である」<sup>9</sup>。ポイエーシス的自己は、歴史的な身体として、歴史的現実の世界の只中で行為的直観を実行する。一つの歴史的な身体として具体化されている私たちの行為的自己は、世界の自己形成の起動点として、自らを取り巻く諸々の形との関係において限定されたある形に自らを限定しながら、世界の構成形態を創造する<sup>10</sup>。それゆえこの世界における行為的直観に先立つ独立で自律的な自己の存在は排除される。私たちのポイエーシス的自己は、私たちの歴史的な身体が〈いま〉〈ここ〉において歴史的現実の世界の中でそれぞれ個別的な仕方では自己限定するという意味において、かけがえのない事実である。私たちの歴史的な身体それぞれのかけがえのなさが私たちのポイエーシス的自己の創造性の起源にある。しかしながら、ポイエーシス的自己は時間空間の中で限定された身体的自己においてのみ具体化されるまさにそのことゆえに、私たちの自己における作られたものから作るものへの展開は必然的ではなく、しばしば危険に晒される。私たちの自己の脆弱さは私たちの歴史的な身体が会うこの不確実性あるいは困難に由来する。

## 2 一 自覚と行為的直観との区別と関係

### 2.1 歴史的な実在の世界において行為的直観によって直接把握可能になる自覚

自覚とは、歴史的な世界が自らの内部で自己限定し、自己形成し、自己表現するということである。自覚は根本的に世界に属することがであり、世界が自らに与えるものである。しかし、これらすべてのことが十全な仕方では現実化するのとは私たちの個別的な自己のそれぞれにおいてであり、その個別的な自己の自覚は「かかる世界の自己自身を限定する唯一的事実として成立するのである」<sup>11</sup>。

世界が自覚する時、我々の自己が自覚する。我々の自己が自覚する時、世界が自覚する。我々の自覚的自己の一人は、世界の配景の中心である。我々の知識は、世界が自己の内に自己を映すことから始まる<sup>12</sup>。

世界の自覚は、それが私たちの自己において経験されることによって、私たちに世界を直接経験することを、つまり世界の直観を可能にする。この直観が行為的直観であり、歴史的な身体としての私たちの行為的身体によって現実化されるものである。自覚は、行為的直観がそれを歴史的な実在の世界における私たちの行為的身体に直接把握可能なものにするかぎりにおいて、行為的直観に同一化される。

### 2.2 自覚と行為的直観との方法論的差異

行為的直観と自覚とは、両者それぞれの経験を可能にする関係性の違いによって相互に区別されうる。行為的直



観は私たちの自己の世界に対する原初的関係を示すのに対して、自覚は世界の自己自身に対する根本的関係を示す。

私たちの自己が世界を映すということは単に世界が私たちの自己に対して対象として現れるということだけではなく、逆に私たちの自己が世界の内部における行動する一つの観点であることを意味している。行為的直観は、世界が世界自身を自らその内部そのものにおいて私たちの自己に対して現れさせるという原事実にはかならない。私たちの自己はそこにおいて世界を構成する諸々の形の受容者でありかつ贈与者あるいは創造者である。無数の個物である私たちの自己が世界を映す、言い換えれば、ライブニッツ的な意味で「表現する」<sup>13</sup>とき、世界は自己形成的世界として自らに現れるのである。

それと同時に、行為的直観が私たちの自己に世界を直接的に経験することを可能にしているまさにその事実ゆえに、その世界に内属する私たちの自己の世界に対する関係とは区別されるべきもう一つの原関係があることが私たちの自己において直接感得される。それはその世界に内属する私たちの自己において世界の世界自身に対する関係がそれとして直接把握されるときである。

西田は、自らの内部に自己自身を映す世界として私たちの自己がそれ自身によって把握される経験の構造に表現を与えようとしている。私たちの自己においてその自己によって内的に経験されるこの二つの関係性の区別から出発して、つまり私たちの自己の世界に対する関係と世界の世界自身に対する関係との区別に基づいて、科学の基礎としての行為的直観と哲学の営為そのものである自覚とを区別しつつ、この両者それぞれに固有の規定を与えること、これが西田の試みていることである。

世界を構成する諸々の形は、私たちの歴史的な身体において現実化される行為的直観によって、そのような諸々の形として私たちに現れる。私たちの自己は、一つの種として、また身体的に限定された存在として世界に属しつつ、世界に対する個物として、この種的に限定された次元を超えていくことができる。行為的直観は、私たちの行為的身体的自己において生きられているこの内在と超越の間の弁証法的関係にはかならない。私たちの自己は世界を一なるものとして〈映し〉つつ、その内部において世界に対立し、世界をある一定の〈形〉において表象し表現することができる。ここに科学の立場が成立するための可能性の条件がある。このような視野に立つとき、科学的認識は自己形成的な世界をその内部におけるある点から対象として見て、それをある一定の形の記号的体系において概念的に表現することであると言える。

これに対して、哲学とは、私たちの個別的自己の個人的自覚ではなく、私たちの有限の自己において経験され、その自己によって概念を通じて表現された、世界そのものの自覚なのである。この自覚において、世界は対象として自己に対して現れるのではなく、自己の自己による自己における直接的な経験として内的に生きられる。

以上から、哲学と科学との立場の違いを、自覚と行為的直観における私たちの自己の世界との関係の差異として、次のように規定することができる。科学は行為的直観による私たちの自己と世界との相互的な関係に起源をもつものに対して、哲学は世界の自覚によって、つまり世界の自己の自己に対する関係の直接把握によって始まる。科学は行為的直観によって原初的に与えられた私たちの自己の世界に対する関係を対象化することによって表現するのに対して、哲学は世界の自覚を表現する私たちの自己によって自らに開示された世界自身の自己表現である。

西田が哲学的知識と科学的知識との区別あるいは両者の方法論上の区別を規定しようとするとき、自覚と行為的直観との差異はより厳密な仕方では提示される。それは「ポイエーシスの自己」と「創造的自己」との区別に基づいた立論の中で為されている。

科学的知識は私たちのポイエーシスの自己がその焦点あるいは起点である行為的直観の現実性に基づいて成立する。行為的直観が私たちに与える原初的な確実性の経験が科学的知識の起源にある。しかし、行為的直観は、自己形成的世界の直接把握として、相互に自己限定的で表現的な諸々の形の只中で現実化されており、それらの形に働きかけ、それらに変更あるいは変容をもたらす、世界に別の配置あるいは構成形態を与えることができる。行為的直観は私たちの自己それぞれを世界の創造的行為の焦点あるいは起点にしうるのである。この世界の創造的行為は世界の創造性のある時ある所で実現、具体化する。しかしながら、行為的直観は世界の諸構成形態の認識の根柢においてつねに作動しているとはいえ、それ自体は世界の創造性そのものの直接的認識ではない。行為的直観は、その起源へと自らを向け返すとき、世界の創造性の原初的根源的認識へと私たちを導く。この方向において、私たち

のポイエーシス的自己は、自らをそのようなものとして把握することを介して、創造的自己の自覚へと自らを深化させていくが、この深化の過程が「否定的自覚」と西田によって呼ばれる思考過程である。この過程を自ら歩むこととそのことが方途という意味での哲学の方法にはかならない。

ここでもう一度西田における哲学的方法とその他の諸科学の方法との区別をまとめておく。諸学の構成の順序に従うとき、哲学的方法が他のすべての科学的方法に先立つ。前者は直接的に創造的自己に基づいているのに対して、後者はポイエーシス的自己によって実行されるからである。このポイエーシス的自己は創造的自己に基づいている。哲学的方法は厳密な意味での自覚によって実行されるのに対して、諸科学の方法は行為的直観に基づいている。事実の順序に従うとき、反対に、行為的直観から出発して私たちの自己はポイエーシス的自己としてまず自覚し、そしてこのポイエーシス的自己が自らの起源に遡ることを通じて私たちの歴史的な身体において創造的自己として自覚するに至る。そこにおいて自覚は世界の自覚を表現している。

### 2.3 創造的自己とポイエーシス的自己との関係

創造的自己は世界の始まりから始まり、たえず始まる〈始源〉である。ポイエーシス的自己は、それに対して、世界の現実的な構形成態の只中であって具体化された一つの始まり、一つの起動点である。世界が無限の多様性の相の下に自己限定するとき、ポイエーシス的自己は世界において行為的直観によって時間空間的に限定された一知覚的中心として経験される。世界が永遠の唯一性の相の下に経験される時、創造的自己は世界の只中でそれとして自覚される。私たちの行為的身体において具体化されたポイエーシス的自己は創造的自己ではない。前者は後者がある限定された形で表現する。無限の創造的自己が私たちの有限の自己において歴史的な生命の世界の絶対的自己否定を介して自らを表現する。創造的自己は世界のノエシス的自己限定として自らに自らを現れさせる。それに対してポイエーシス的自己は世界のノエマ的自己限定の中で、自らの周りに構成される世界との関係において自らにそれとして現れる。

#### 注

- 1 「自覚について」『西田幾多郎全集』岩波書店、24巻、2003-2009年、第9巻、505頁 [= IX-505]。
- 2 VIII-233.
- 3 西田において、「形」とは現実のすべての分節化を構成しているものにはかならず、それらの分節化は現実に対して超越的主体によって構成されたものとしては考えられず、むしろ現実の内部において把握され、分節化された世界の中で自らに形を与えることがその本質である行為する身体によって生きられたものと考えられている。
- 4 *Ibid.* 強調引用者。
- 5 *Ibid.*, 215. 強調引用者。
- 6 *Ibid.*, 233.
- 7 IX-497.
- 8 西田は「作られたもの」を「単に与えられたもの」からはっきりと区別する。後者は世界の外部にとどまる〈与えるもの〉を前提とするのに対して、前者は世界の内部そのものにおいて作られる。
- 9 「自覚について」IX-526.
- 10 ここで問題になっているのは、私たちの自己とそれが生きる世界との相互的な表現的關係である。
- 11 *Ibid.* (*Ibid.*)
- 12 *Ibid.*, 528.
- 13 この「表現する」という語の定義に関して、西田はライプニッツに依拠している。「映す」という語はここでライプニッツの意味での「表現する *exprimer*」の同意語として使われている。「あるものについて言えることと別のあるものについて言えることとの間に一定の規則的關係があるとき、[・・・] あるものは別のあるものを表現している」(G. F. LEIBNIZ, *Discours de métaphysique et correspondance avec Arnaud*, Paris, Vrin, 1993 (6<sup>e</sup> éd.), p. 180-181)。